

社会福祉法人三篠会
高齢者総合福祉施設 楽々園 Kisui
施設長
(重症児者・福祉医療施設鈴が峰
前・事務長)

上本紀孝氏に聞く

——社会福祉法人三篠会の沿革と概要からお聞かせください。

三篠会は、酒井亮介理事長の祖父、酒井法城氏が1952年、自身が住職を務める寺院の境内に開設したいづみ保育園を嚆矢とします。先代理事長である酒井慈玄氏が1968年に三篠会を設立し、現在は法人本部のある広島エリアに15施設、関東エリアに9施設、関西エリアに2施設を設け、児童だけでなく高齢者や障がい児(者)を対象とした幅広い福祉事業を展開しています。

——三篠会では、IT化に積極的に取り組まれてきたと伺っています。

高齢者施設では、入所されている方の記録は紙を用いて行っていることが当たり前でした。なお、法律的には過去5年分の記録を保存さえしていれば問題はありませんが、5年以上入所される方々も多く、このような方々の記録を保存することは、高齢者の介護やケアを行う上でとても重要になってきます。しかし、紙による記録では、過去の情報を調べようとすると膨大な手間と時間がかかり、と

ても非効率的であることは言うまでもありません。それ故、当施設が記録の電子化を目指すのは、至極当たり前でした。

加えて、電子化は当法人が先進的な取り組みを行っているというイメージ戦略としても重要な側面を持っていました。

2014年頃、都市部の他法人の高齢者施設で介護記録の電子化が進む流れがありました。それを受けて、当法人の施設スタッフからもIT化の必要性を訴える声が上がったようになったのです。同時に、福祉業界の慢性的な人材不足の中、若く優秀なスタッフを集めるために職場環境の改善は必要でした。この人材確保の観点も相まって、2015年から電子化による業務効率改善を積極的に進めることにしたのです。

——重症児者・福祉医療施設でのIT化も、その流れの中で推進されたのですか。

重症児者・福祉医療施設は、「病院」ではありません。しかし、医療行為が行われているため、レセプトコンピュータ(レセコン)による診療報酬請求業務は必須です。当時は、紙カルテからレセコンへ



上本紀孝 (うへもと・のりたか)氏
1994年広島経済大学卒。一般企業勤務を経て、1997年社会福祉法人三篠会入職。2014年重症児者福祉医療施設「鈴が峰」事務長、2019年「楽々園 kisui」開設準備室 室長、2021年より高齢者総合福祉施設「楽々園 kisui」施設長。



重症児者・福祉医療施設「鈴が峰」外観。従来、2階建ての施設の上に3階を増築し、100名の重症心身障害児者を受け入れている。

広島県/神奈川県・三篠会「鈴が峰」「ソレイユ川崎」 Close-Up
2022 AUGUST

高度な医療と福祉の機能を併せ持った 高機能な電子カルテを導入することにより 重症心身障害児(者)ケアの質を向上させる

広島県を中心に、関東・関西エリアを含め26もの高齢者向け・重症心身障害児者向け施設を有する社会福祉法人三篠会。同法人では、2018年から、同法人の持つ重症心身障害児者向けの4施設に対して、電子カルテシステムの導入を開始。医事請求業務の効率化、スタッフ間の情報共有の推進、入所者・通所者に対するサービスの質の向上を実現している。同システム導入のキーパーソンである「楽々園 kisui」施設長の上本紀孝氏に電子カルテシステム導入の経緯を、システム稼働中の「鈴が峰」「ソレイユ川崎」のスタッフらに電子カルテシステムの有用性について話を聞いた。

の入力業務が不可欠で、私を含めた事務職員にとって、非常に負荷の大きな業務でした。大きな病院であれば、入力専門の医療クラークなどが担当したのでしようが、当法人では人的リソースが限られていたことから、事務長の私も入力業務を行う必要がありました。

ただ、請求情報の手入力にはトラブルも多く、ある時レセプトデータが消滅してしまうこともありました。重症児者・福祉医療施設でも、記録を電子化してレセコンにデータを移行する電子カルテ導入の必要性が高まっていたのです。

——電子カルテシステム導入の経緯について、詳しくお聞かせください。

当時、私が勤務していた重症児者・福祉医療施設「鈴が峰」は日医標準レセプトソフト「ORCA」を使用していました。そのため「ORCA」と連携可能で、介護や療育も含め1つのソフトウェアで管理できる電子カルテシステムの導入を検討することにしました。結果、中小規模の医療施設で使用している電子カルテシステム3社に加え、中国・四国地方の重症児者・福祉医療施設である「幡多希望の家」の事務長に紹介されたパシフィックメディカル(当時、パシフィックシステム)の電子カルテシステム「MALL」が候補に挙がったのです。

理事長らと共に、4社のプレゼンを受けましたが、「MALL」は重症児者・福祉医療施設への導入実績があり、機能が優れていること、当方のカスタマイズ依頼に柔軟に対応してくれること、イニシャルコストとランニングコストがリーズナ



「鈴が峰」にほど近い養護老人ホーム/特別養護老人ホーム「楽々園 kisui」。2021年4月に開所した同施設をはじめ、三篠会は多くの高齢者施設も運営している。

ブルであること、特にランニングコストが抑えられている点を評価し、当法人の重症児者・福祉医療施設への導入を決定しました。

当法人の重症児者・福祉医療施設には、「ソレイユ川崎」「鈴が峰」「ふれあいライフ原」「ベルデさかい」の4施設があります。まず、「ソレイユ川崎」に導入を進め、その状況を検証しながら、他の3施設に順を追って導入を進めました。私は4施設の価格交渉と「鈴が峰」での導入準備を直接担当しました。

——電子カルテシステム「MALL」の有用性についてお聞かせください。

一事務職員の立場としては、レセコンへの入力業務がなくなり業務効率が大幅に上がったことが大変有益です。法人内

でのシステム導入の担当者の立場としては、端末のライセンスがフリーであることが大きな強みと考えています。端末数は臨機応変に変更する場合が多いため、ライセンスフリーである点はコスト抑制につながり、有難いですね。また、「MALL」は療育に関する機能を網羅していますし、レセプトソフト「ORCA」との連携も可能な点も評価しています。

——電子カルテシステムの中小規模医療施設への普及には何が必要ですか。

まずは、コストが抑えられていることが重要です。特にランニングコストはしっかりと支払い続ける費用となりますので、費用対効果を考える上で、経済的に余裕の少ない中小規模の医療施設ではとりわけ重視されます。「MALL」は、この点、他の電子カルテシステムに比べ、リーズナブルに導入・運用できるシステムだと感じています。

また、電子化の必要性とそのメリットをスタッフ内に周知することも重要だと考えています。例えば、紙カルテから電子カルテシステムに移行したことで、紙カルテやフィルムなどの運搬業務もなくなることで電子化のメリットの1つと言われます。しかし、具体的にどの程度効率化されるのか、例えば施設内を移動するために掛かった時間や歩いた歩数など、目に見える形で業務が効率化されることについて示せているでしょうか。それができれば、スタッフの意識付けにつながりますので、IT化に消極的なスタッフの理解も得られやすいのではないのでしょうか。

電子カルテならではの長期間の記録保持への貢献と共に IT化による業務の効率化、業務負担軽減等の実現を図る

社会福祉法人三篠会
重症児者・福祉医療施設 鈴が峰 事務局長
岡野 崇 氏に聞く



岡野 崇（おかの・たかし）氏
広島工業大学卒。2004年三篠会入社、介護職員、相談員を経て現職。

社会福祉法人三篠会は、2020年から同法人の持つ重症児者・福祉医療施設にパシフィックメディア製の電子カルテシステム「MALL」を次々に導入し、稼働を開始した。「ソレイユ川崎」に続いて、2番目の施設として導入されたのが広島市内唯一の重症児者・福祉医療施設「鈴が峰」である。同施設の事務局長である岡野 崇氏に、まず、「鈴が峰」の概要について話してもらった。

「2000年に開設した『鈴が峰』は、長期入所定員100名、ショートステイなど短期入所の定員10名の規模で運営しています。このほか、通所支援として放課後等デイサービス、生活介護、児童発達サービスの20名の定員で実施してきましたが、現在はコロナ禍ということで、定員を15名に制限しています。」

なお、「鈴が峰」には、高齢者向けの特

別養護老人ホームやグループホーム、ケアハウスを併設しており、複合的な施設として運営しています。」

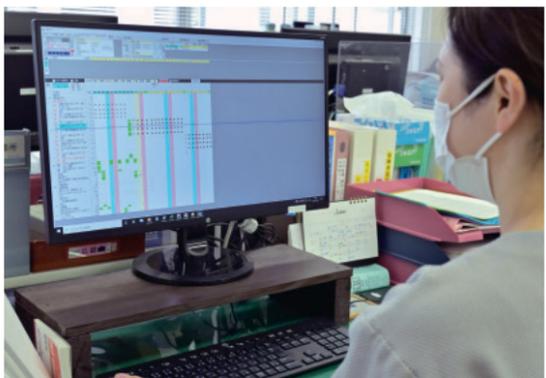
現在、スタッフ数は高齢者施設の担当者100名を含め約300名が勤務。そのうち、常勤医は3名、非常勤医4名で、この他に当直勤務の医師がいる。看護師は常勤・非常勤を含め、約55名が勤務している。また、「鈴が峰」は地域の障害福祉において中核となる役割を担っている。広島市から委託を受けて重症児者の地域生活支援センターを運営しているほか、相談支援事業所を設けて在宅の障がい児者で日常生活に困っている方の相談を受け、福祉サービスのコーディネートをしていると岡野氏は話す。

「重症心身障害児者の家族の方はなかなか相談できる場所がないので、当施設ではそのような方々の相談に乗りながら、訪問看護や施設でのショートステイ、通所支援やヘルパーの紹介などもさせてもらっています。」

電子カルテシステムの運用 ベッドサイドでの入力体制を構築 適切な運用で業務負担の軽減を図る

「鈴が峰」が電子カルテシステム「MALL」を導入したのは、2020年8月。同システムの有用性について、岡野氏はつぎのように話す。

「電子カルテシステムに入力した内容がレ



「鈴が峰」の電子カルテシステム端末。端末数はノートPC、デスクトップ、タブレット端末等で60台以上。診療業務や医事業務等の効率化に貢献している。

セコンに反映されるため、事務スタッフの業務負担が軽減されたのは大きなメリットにあげられますね。また、電子カルテシステムは指示や処置に関する入力を適切に行うことが重要で、それが診療記録の透明性を高めます。当施設では、タブレット端末やノートPC端末を活用してベッドサイドでの入力ができるので、適切なタイミングでの入力が可能になっており、診療記録の質を担保しています。」

重症心身障害児者の診療記録は、前述のように長い年月入所されていることから、長いスパンでの健康管理が重要となります。この点において、電子カルテシステムの使用は大きな意味を持ちます。なお、短期的な視点からのメリットとしては、「MALL」は検温記録等が時系列で表示される点は優れていますね。入所者の状態変化を随時捉えることができ、

適切な対応をとることができそうです。」

「MALL」は稼働以来、安定稼働を続けていると岡野氏は話す。

「以前は月に1度、パシフィックメディアの担当者システムに関するミーティングを行っていましたが、現在は特に問題もなく稼働しているもので、何かあれば随時対応してもらえるようにしています。要望を挙げるのならば、重症心身障害児者のケアでは、療育が重要となりますので、『MALL』には今後、この療育に関する機能をぜひ充実させていって欲しいですね。」

今後の「鈴が峰」の運営について、岡野氏はつぎのように話す。

「コロナ禍のため、面会や通所事業等を制限せざるを得ませんでした。今後は、施設も落ち着いてきました。今後は、施設の活動を以前の状態に戻していきたいながら、当施設の存在を再度アピールする取り組みを始めたいと考えています。」



重症児者・福祉医療施設 「鈴が峰」

住所：広島市佐伯区五日市町菅賀 104-27
重症児者福祉医療施設 施設長：加藤 聰
入所定員：100名

三篠会 ソレイユ川崎

神奈川県

社会福祉法人三篠会
重症児者・福祉医療施設 ソレイユ川崎
施設長

江川文誠氏に聞く

「ソレイユ川崎に入職した経緯からお聞かせください。」

私は2005年に「ソレイユ川崎」がオープンする際に入職いたしました。

日本初となる重症心身障害児施設は、1961年に東京都多摩市に島田療育園（現・島田医療センター）が開設されて以降、このような施設は徐々に増加しました。私はそのように重症心身障害児施設が増加する中で川崎市にて障がい児医療に従事していましたが、当時川崎市には重症心身障害児施設がなかったため、担当したお子さんを東京都など近隣の施設にお願いすることとなり、心苦しい思いをしておりました。待望の重症心身障害児施設が川崎にオープンすると知り是非お手伝いしたいと考え、今に至ります。

「ソレイユ川崎」の概要についてお聞かせください。

現在、「ソレイユ川崎」には、満床となる100名の重症心身障害児（者）の方が入所しています。入所者の平均年齢は40歳を超えており、高血圧やがんなど成人が罹患する疾病を患う入所者も多く、常勤の5名の小児科医と10数名の非常勤医が協力しながら、こうした患者の対応



重症児者・福祉医療施設「ソレイユ川崎」外観。「ソレイユ」とは、フランス語で「ひまわり」を意味する。ひまわりのように人々の笑顔とエネルギーあふれる施設作りを目指している。

江川文誠（えがわ・ぶんせい）氏

1979年上智大学理工学部卒。1985年聖マリアンナ医科大学卒。聖マリアンナ医科大学等を経て、2005年社会福祉法人三篠会 重症児者福祉医療施設「ソレイユ川崎」施設長に就任。特定非営利活動法人療育ねっとわく川崎 理事長。



をしています。

また、私の出身である聖マリアンナ医科大学と連携し、重症心身障害児（者）でも一般人と同様の医療を受けられる体制も築いています。

「電子カルテシステム導入の背景についてお聞かせください。」

従来、重症心身障害児者は、在宅か、病院に社会的入院をするケースが多数を占めていました。しかし、近年は国の方針転換により、これまで病院が担ってきた、特に重症心身障害児（者）を施設に入所させるケースが増えました。それ

に伴い、施設においても入所者の医療ニーズは高まり、施設での医療の高度化・複雑化が進みました。結果として重症心身障害児に対する診療報酬も包括払いから出来高払いに変わり、医事業務に大きな負荷が掛かるようになったのです。施設において、カルテの電子化による業務効率化が喫緊の課題となりました。そこで、パシフィックメディアの「MALL」を

導入することになりました。

「電子カルテシステム「MALL」についてお聞かせください。」

導入当初こそ、戸惑いもありましたが、パシフィックメディアが細やかに対応してくれて操作性や機能がどんどん良くなり、使いやすいシステムになりました。まず、手書きに比べ、診療の記録がしやすくなり、省力化が図れた点は大きいですね。短縮した時間を入所者への対応に割り当てることができ、より親身に、長時間対応することが可能になりました。また、どの端末からでも診療情報を参照できるので、スタッフ間の情報共有も進み、医療安全の面でも極めて有用であると評価しています。

なお、ショートステイの入所者は、期間も短いことから対応があつたしくなりがちでしたが、パシフィックメディアは、当院で独自に運用していたショートステイのプログラムを「MALL」に移植してくれるなど、当施設のニーズに対応してもらった点は有難かったです。

電子カルテ導入によって、当施設の医療・介護・事務の機能は大幅に向上したと評価しています。

「ソレイユ川崎」の今後の展望についてお聞かせください。

当施設では、ショートステイのニーズが高いので、この分野でのスタッフを拡充していきたいですね。特に介護関連のスタッフの確保が大きな課題となっています。最大限の努力をしてスタッフを確保し、地域のニーズに応える療育を実現したいと考えています。

異動時、多職種勤務の中での紙カルテ運用に大きく驚く 福祉機能が充実した電子カルテシステム導入を高く評価

社会福祉法人三篠会
重症児者・福祉医療施設「ソレイユ川崎」
キャンパス長

武田義博氏に聞く



武田義博（たけだ・よしひろ）氏
1991年龍谷大学文学部卒。1991年社会福祉法人三篠会入職。2013年より重症児者福祉医療施設「ソレイユ川崎」キャンパス長、現在に至る。

前出のとおり、社会福祉法人三篠会は、2018年から同法人の重症児者・福祉医療施設にパシフィックメディカル製の電子カルテシステム「MALL」を導入、稼働を開始しているが、「ソレイユ川崎」は、その第1号の施設である。同施設の事務部門を統括するキャンパス長の武田義博氏は、「ソレイユ川崎」の概要を、つぎのように話す。

「2005年、川崎市初の重症児者・福祉医療施設としてオープンした『ソレイユ川崎』は、入所者が100名、シヨートステイなど短期入所者が1日約5名、デイサービス等の通園事業は1日約20名を受け入れています。

当施設に入所している重症心身障害児者で18歳以下の方は、2割以下に過ぎません。重症児者・福祉医療施設は病院と

異なり、福祉の機能も兼ね備えており、入所者・通所者に病気の治療と併せて福祉的な支援も実施しているのが特徴でもあり、運営の難しいところでもあります。同施設では現在、事務職員として常勤事務員4名、パート職員3名、診療報酬請求専門の担当者1名の計8名が勤務している。

電子カルテシステム導入 医師も看護師も望んでいた導入 機能・価格ともに合致したシステム

2013年に「ソレイユ川崎」に異動した武田氏は、スタッフの職種の多さに驚き、情報共有のための電子カルテの必要性を強く認識したと話す。

「重症児者・福祉医療施設では、医師や看護師、事務職員だけでなく、薬剤師や栄養士、介護職員など様々な職種のスタッフが働いていますが、現場では紙カルテが使用されており、情報共有が困難な状況でした。また、事務職員の重要な業務である診療報酬請求も、紙カルテから直接入力



電子カルテシステム「MALL」を操作する看護部部長の高木由美氏。医療だけでなく福祉に関する機能も充実しており、重症児者・福祉医療施設の運営に貢献している。

しており、その非効率性に驚きました。特に、診療報酬請求専門職員のスタッフが入院していた時期には、私も請求業務を直接担当することになり、苦勞しました。そこで、電子カルテシステム化を法人に進言し、2018年8月に電子カルテシステム「MALL」が導入されることになったのです」

電子カルテシステム導入に対しスタッフの抵抗感は少なかったと武田氏は話します。「医師は電子カルテ導入を熱望していましたが、看護師も若いスタッフが多かったこともあり、電子カルテシステム導入はスムーズに進みました。

2017年9月に電子カルテシステム

導入の方針が決定し、翌2018年8月に稼働を開始しました。スタッフへのレクチャーは約半年ほどで、稼働当初こそ慣れていないこともあって苦勞しましたが、今では大きなトラブルもなく順調に稼働しています」

武田氏は、「MALL」の有用性についてつぎのように話す。

「パッケージ販売されている電子カルテシステムは多いですが、価格にも大きな幅があります。その中で『MALL』は、当施設のような中小規模でもリーズナブルな価格で導入することができましたし、重症児者・福祉医療施設には不可欠である福祉に関する機能が充実しているのが良いですね。パシフィックメディカルには、バージョンアップする度に、福祉に関する機能を拡充してもらっており、たいへん感謝しています」

さらに、武田氏は電子カルテシステム導入の成果をつぎのように話す。

「医事関係の業務がとても楽になりました。医師や看護師が入力した診療データを診療報酬請求用に整理してレセコンに送信するだけで、請求業務が効率化されています。また、電子カルテシステムの端末さえあれば、どこにいても入所者の情報を把握できるので、入所者の家族から入所者の現況の問い合わせがあった際、スムーズに、かつ正確な情報をお伝えすることができるようになりました。総じて、日々の入所者さんの様子を記録する機能が格段に使いやすくなったと思います」

システムに対する要望は、2〜3カ月に1度、パシフィックメディカルの担当者や各職種のスタッフと協議し、システムの変更や機能追加の要望を話し合っている。高木氏は、治療行為に関する希望や要望について即時に表示できる機能や、病状が悪化して大学病院等に転院し、治療後に施設に戻った際のカルテ記録の取り扱いなど、改善点はまだあると話す。

「医療は日々進化していますが、それに応じてカスタマイズできる『MALL』は優れたシステムです。今後もパシフィックメディカルと協力しながら、システムの拡充に努めたいと考えています」

高度な医療的ケア提供も必要な施設での特別な電子カルテ運用 医療・福祉・介護が融合する施設独自のカスタマイズを実現

社会福祉法人三篠会
重症児者・福祉医療施設「ソレイユ川崎」
看護部長

高木由美氏に聞く



高木由美（たかぎ・ゆみ）氏
1995年回生看護学院卒。大阪回生病院を経て、2006年社会福祉法人三篠会入職、重症児者福祉医療施設「ソレイユ川崎」勤務。2016年より看護部部長、現在に至る。

また、ご家族の方に入所者さんの様子を伝えるのも重要な仕事です。昨今はコロナ禍のため、面会を制限する必要があることから、ご家族と入所者さんには、より細かなケアが必要な状況です」

電子カルテシステムの構築 特有の福祉関係の機能を充実させ 多職種間の情報連携を実現

高木氏は、システム構築に際してパシフィックメディカルと共に「ソレイユ川崎」での業務に適したカスタマイズを実施したが、その内容をつぎのように話す。

「当施設は一般的な病院と異なり、福祉に関する数多くの項目を入力・保存して管

理・運用する必要があります。そこで、これらの新項目を洗い出し、『MALL』に追加しました。これらの項目は、従来『MALL』の帳票といつて表計算ソフトの『Excel』を用いて運用してきましたが、『MALL』導入に際し、その『Excel』帳票を『MALL』に移植しました。『Excel』帳票には、福祉ならではのフェイスシートや個別支援計画の作成なども含まれますが、これも『MALL』に取り込んだことで、紙ベースの運用から電子化に移行することに成功し、満足しています。当然、『MALL』導入による電子化で、各職種のスタッフ間での情報共有が容易になったことは、入所者並びにスタッフにとって大きなメリットであると実感しています」

カスタマイズ化では苦勞したが、パシフィックメディカルの協力について、高木氏は話す。

「当施設では、医師や看護師だけでなく、生活支援やリハビリ、呼吸ケアチームや栄養サポートチームなど多くの職種が絡むので、全ての項目についてマニュアル作りを行うなど、システム導入前の作業は膨大で苦勞しましたが、パシフィックメディカルの親身な協力もあり、良いシステムが構築できたと感じています」

高木氏は、タブレット端末によるシステム運用についても、高く評価している。

「当施設には約10台のタブレット端末が導入されていますが、ベッドサイドで体温や脈拍やサチュレーションを測定し簡便に記録できます。また、入所者の傷の具合などをタブレット端末で撮影して、そのまま『MALL』画面に貼りこみ、他



タブレット端末を操作する高木氏。ベッドサイドでの入力やカメラ機能を用いた運用など、迅速な運用だけでなく、医療安全でも貢献していると高木氏は評価している。



重症児者・福祉医療施設「ソレイユ川崎」

住所：神奈川県川崎市麻生区細山1203番地
重症児者福祉医療施設 施設長：江川 文雄
入所定員：100名